



ここクリーブランドは、過去、信州大学から整形外科の中村幸男先生、循環器科の筒井 洋先生、薬理学の弘瀬雅教先生はじめ諸先輩方が留学されており、信州大学からの留学先としてはさほど“まれ”ではない都市といえます。2008年の4月よりポスドク（博士取得後過程）として勤務しているトーシヒガンセンターは2000年ごろ設立され、血液腫瘍科は、つい1週間前にできました。新しいスタッフを雇い入れ、現在のポス Jarek Maciejewski（ヤレック・マチェイエフスキー）教授がヘッドに昇格したのに伴い、私も所属が変わりました。がんセンターには日本人は、隣のラボに岡山大学から一人いらっしゃっているのみで、多くの日本人研究者は隣のクリーブランドクリニックファンデーション（本院）かケースウェスタンリザーブ大学（CWRU）病院に勤めています。留学する前には中村先生の留学だよりを拝読し、筒井先生・弘瀬先生から伺い、とても寒いと訊いておりました。緯度が、函館と同じといえば少しイメージが湧くかもしれませんが、1月の最低気温はマイナス30℃となり、窓は凍り付いて数カ月開きません。今年は特に雪が多いらしく、今日も多くの学校が休みになりました。

留学するきっかけは、現在のポスの数年前の研究テーマ（顆粒リンパ球増多症）が私と共通していたからです。2007年1月にコネなしで履歴書を送り、翌年2月に採用が決まるまで、国際電話によるインタビューと、国際学会の帰りに立ち寄ったクリーブランドでの面接が必要でした。印象的だったのは、ラボメンバー全員と一人ひとり面接したことで、ポスは、後に私の印象をメンバーに尋ねていたそうです。ポスとのやり取り

は、10回メールを出して返事は1回あるかないかでしたが、採用は、ある日突然決まりました。

留学した当初は、顆粒リンパ球増多症に取り組んだのですが成果が出ず、すぐにテーマを変えられました。現在の研究は、骨髄異形成症候群の患者さんの90万以上のSNP（一塩基多型）を一度に調べることにより、今まで検出できなかった染色体の異常や病気のなり易さを突き止めることです。日本では研究を一人で行うことが多く、依頼するより自分でやったほうが、という考えが強かったのですが、こちらに来てからは、ボスから、よく「周りを使うように」と注意されます。実際、テクニシャンの方や学生さんをお願いした方が、はかどることも多くありますし、新しいアイデアを思いついてくれることも頻繁にあります。特に短期間（数カ月から1年）実験に来るCWRUの学生さんはとても優秀で、給料をもらってラボに来ていて、勤務期間の後には、従事した研究者から評価の書類を書いてもらいます。良い評価が得られれば次に良い施設に採用が可能になりますから、本当に必死で実験します。

こうして、最近ようやく、少しずつ周りと協力して仕事をするようになり、実験も忙しくなってきました。運良く、昨年12月にアメリカ血液学会で口演をする機会を得て、貴重な体験ができました。発表後の質問には“たじたじ”でしたが、恥ずかしい体験もあとになれば良い思い出です。この発表をきっかけに、(悲しいかな、英語ではなく)日本語の能力を買われ、名古屋大学小児科との共同研究が始まり、来週からは短期で、同施設から留学生を受け入れます。

そんな中でも、やはり時々思い出すのは信州大学のことです。最近では、同僚の医師のポケットベルがなるたびに、私も昨年まで患者さんを診ていたのだと懐かしく思い出します。ともあれ、資金難により何人かのポスドクやスタッフが解雇される中、なんとかしてJ1ビザの切れるころまでは頑張りぬくつもりであります。信州大学第2内科の皆様には、私を（喜んで？）クリーブランドに送り出してくださり、大変感謝しております。また、出発前には信州大学病院より留学支援を賜り、本当に助かりました。紙面を借り、お礼申し上げます。

(2009年2月)

(信州大学医学部内科学第2講座所属)